

# パキスタン・事始め

7.23～8.13

手塚 紀恵子

今年の夏休みは、パキスタンで過ごしてきました。トラベルだけのトラベルで、決して満足のいく旅ではなかったんだけれども、パキスタンという国との出会いは衝撃的で、あのひたすらに荒々しく崇高な山々に囲まれて過ごした日々は忘れ難く、また近年中に是非訪れてみたいもんだ、と思ってあります。

目的地は、かの有名なナンガ・パルバットの南壁（世界最大の比高4500mを誇り、ルパール・フェイスと称する）のB.C.。パキスタンでは、標高の低い所は、ギラギラの太陽に岩屑山ばかり、緑を見る事も稀なんだけれども、標高が高くなると降雪の恩恵に浴する事ができるんでショウね、水と緑に恵まれて、標高3500mのB.C.あたりは、清冽な流れに、柳・モミなどの木々、エーデルワイスをはじめ様々な花々に彩られた草原になっており、放牧の山羊、馬、ロバなんかが行き交う、マル亨の世界。なかなかのもんでした。そして、こちら辺の山々は、ネパールの山々と比べるとかなり厳しいそうで、本当にナンガボーカリじゃなくって、どの山も、シャープな岩峰群が懸垂氷河やアイス・フォールで武装しており、どう登るの？、て感じで、山を見上げてはただただ唖然としてありました。

私たちのパーティは、B.C.からナンガとは谷を隔てて向かい合っているルパールピーク（5595m）と称する山に登る予定だったんだけれども、悲しいかな到達高度は4600m余、雪線の高いここいらの山では、ほとんど裾野の徘徊だけに終わってしまった。たゞ感じでした。登れなかった理由は、一応病人が出てしきったから、という事になりますが、私自身は、もしアタックのチャンスが与えられたとしても、あの山は登れなかったんじゃないかなうか、と思っています。

今回の旅は、某旅行社の軽・エクスペディションと銘打つ企画で、軽！と称するからには、軽であるべきそれなりの条件があると思うんです、既知のルートである事、登頂の可能性がそれなりにある事、等、ところが今回の旅は、全然違う。遠い過ぎて、これがまたトラブルの元、て事に当然な、た訳です。まず、山が違う、標高が違う、

(その旅行では、隣りのシャイヨリ(5971m)をルパール・ピークと誤認しくメンバーを公募していた。(はなはだ問題!)、おまけに山が難しそうである。(帰国してから読みだヘンリッヒコッファーの本では、どうやら別のルートから登頂しているらしい。ルート選定の誤りだった可能性もある。でもどっから接近してもあの山は難しそう!)全く、甘言に乗って大枚叩いてのこの連いで来た我が身の方にも腹が立つたけど、まるで誇大広告、あざけりにも樂観的な企画、あれでプロの仕事か、ヒ、こちら邊はしっかり苦言を呈したい所だ。それでも、とにかく後にはひけぬ、ヒカンバレヌだけはカンバレス、と思っていたので殊勝にも。ところが、〇氏の「技術的に全員でアタックする事は無理だから、まず男性だけでアタックする。」との提案には、100歩譲っても承服できぬ。出発しておなければお互いの力量の分からぬ寄せ集めのパーティの中で、体調を崩さないように注意したり、誰よりもしっかり歩こうと努力したり、装備もがんばって自分で担ぎあげてきた事に、正當な評価を与えられないとしたら、憤慨するのは私はかりではありませんまい。〇氏には〇氏の考えがあり、私は私でしっかり自己弁護してしきつた事になるのかもれません。まさしくトラブルと称すべき詰し合いの末、私は、体調の思わしくない丁氏に替わり、アタックメンバーに組み入れてもらいました。自分の中にこんなにも激しい登頂欲があったという事に、我が身の事ながらビックリしてしきました。

さて、B.C.で下痢をしたりで今一つだった丁氏は、C.(4300m)にて、朝テントから出ようとして倒れたきり寝たきりの人になってしまい、当然アタックは中止、彼の救出に全力を注がざるを得なくなってしまった。ところがこれがヒにかく大変。ちょっと太めだったかも知れない丁氏は、体の自由が全くきかない<sup>6人(シナギホチ)</sup>であり、すだ袋をひきするような重さ。シェラフに入れ、全員で運んでも、ワンピースで2,3mしか進めなかったり、急なガレ場のトラバースに足を踏みはずして私がシェラフにしがみつく事も時々、…これで本当にB.C.まで辿り着けるのだろうか!この搬出に関しては、いろんな事があるたのですか長くなるので省略します。とにかく、彼は生きたままB.C.に降ろされ、ナンカを登つていた福岡登行会のドクターの治療を受け、劇的回復を遂げる事ができたのです。ドクターがもし居なかつたら、…ゾーッ!皆さん、高山病、て本当に恐いですよ。丁氏は、回復してからも、中枢神経系の障害が残り、バランス感覚が戻らない、反応が遅い、考える事ができない、倒れる前

後3日ほどの記憶がない、等々ありとでも不安そうにしておりましたか、帰国してから完治したとの事です。そして、再び高峰に向かうべく第一歩からのトレーニングを開始したそうです。

さらにトライアル中のトライアルは、この遭難されぎの最中にハイポーターが財布を盗んだという嫌疑をかけられ、皆の目前で身体検査をさせられるという破廉恥極まりないもの。確かにパキスタンの人々、すいぶん違う所あるけれど、こんな事が許されないのは万国共通の倫理ってもんだと思う。ただ、差別意識が優先してれば何を言ってもむだだけだ。結局、財布は出てこなくて、私はこの事にどんな決着がついたのか知らないけれども、翌朝、ハイポーターはもう笑っていた。使われた身の悲しさ、嬉びで歌まで歌っていた。彼には彼の採算があってやっている事なんでしょう。責められないけど、実に不愉快。身体検査を実施した側（ジャパン）は問題外、話にもならない。

その他、大小様々、行く先々で何かあるって感じの旅だったけど、とにかくナンがけりっぱでした。昔読んだ「8000mの上と下」、あの本にはすいぶん焼かれてけど、そのヘルマン・ゲールが一人逃った長い縦線も見えます。疑惑の人、メスターが弟を見捨てたとかそういう奴とか、あの「ナンが疑惑」の舞台になったのもこのルパールです。足許から突然4500m迫り上がっていくこの大岩壁に威圧され跳發されれば、ゲールやメスターのやうな超人でなくたって、单なる日本人のハイカーだって、熱く体ごと湯騰して、りくるりくる世界に没入しましきうであります。ネイチャーショックとでも言うのかな、私なんかがあたり前のように抱いてる自然の秩序感というものはパキスタンではなくて、もっと厳しく圧倒的で、かつ対極的な自然（高さと低さ、暑さと寒さ、豊饒と不毛）が、息使いも荒く我が身に迫ってくる、という感じか、とにかく新鮮でした。

それに、宗教の事とか食習慣とか、その他もろもろ、生きてることの生き方とか、自分ががんじからめにされているお仕着せの日本流とは、かなり趣きを異にしているのも、何とも小気味良いものですね。人生のバリエーションはいくらでもあるものです。とにかく、「山も巣も」し、かり気に入ってしまって、帰りはパキスタンの民族衣装を買つて恥ずかしくも着て帰ってきた、という私なのです。〈地上をあまりいい氣になつて脚歩するでない。別にお前に大地を裂くほどの力があるわけでもなし、高い山々の頂まで登れるわけでもあるまい。——コーランヨリ——〉